

「個人的人格」と「社会的連帯」とのあいだ

——デュルケム『社会分業論』・再考——

芦 田 徹 郎

Between “*Personnalité Individuelle*” and “*Solidarité Sociale*”

A Study of Durkheim’s *De la division du travail social*

ASHIDA Tetsuro

Abstract: Emile Durkheim’s *De la division du travail social* was written in 1893, originally inspired by the ambivalent relationship between “*la personnalité individuelle*” and “*la solidarité sociale*” in modern society, which is still an important issue today. He says that the antinomy between being more personal and being more united (*solidaire*) is superficial. But in fact, he is well aware that there are serious real contradictions between the two. This paper tries to show the antinomy or the contradictions as clearly as possible through a rereading of the book. It is also a preliminary work to explore how human ties are and will be in today’s society where individuation or individualization continues without end.

Key Words (Fr.): *solidarité sociale*, *lien*, *conscience individuelle*, *conscience collective*, *personnalité individuelle*, *personnalité collective*, *personne humaine*, *culte de l’individu*

要旨：エミール・デュルケムがその著『社会分業論』（1893年）をあらわすきっかけになったのは、近代社会における「個人的人格」と「社会的連帯」との関係という、今日においても重要な意味をもつアンビバレントな問題である。彼は、人びとがいよいよ個人的になることとますます連帯的になることとの二律背反は、表面上のものだという。しかし実際には、彼は、そのあいだに深刻な現実的矛盾が存在していることも十分に認識している。本稿は、この著作に即して、「個人的人格」と「社会的連帯」とのあいだに存在する二律背反ないしは矛盾を明確にしておこうとするものである。それは、個人（主義）化が止めどもなく進む現代社会における人びとの絆のあり方を探るための予備的作業でもある。

キーワード：社会的連帯、絆（紐帯）、個人意識、集合意識、個人的人格、集合的人格、人間的人格（人類的人格）、個人の礼拝

凡例

本論考で取り上げるデュルケムの著作および外国語の参考文献は、すべて邦訳がある。原著も参照しているが、レファランスは訳書の該当頁で示している。『社会分業論』（田原音和 訳 2017、ちくま学芸文庫）については頁のみを、他のデュルケムの著作については邦訳者名と訳書の出版年の後に頁を、参考文献については著者名と訳書の出版年の後に頁を、記している。引用文の一部の語句に付いている原語は芦田によるものである。重要と思われる、訳語では原意が把握しにくかったり、誤解を生む恐れがあると思われるものについて付記しておいた。また、引用文中の〔 〕（欧文では []）は芦田が補充したものである。〔……〕は省略を示している

1. 個人的人格と社会的連帯という問題

エミール・デュルケムの最初の主著である『社会分業論』は、1893 年に出版された。ヨーロッパ社会が前近代から近代へと大きな変容をほぼ成し遂げたこの時代、フランスでも、雇用労働や機械化が進み、企業間の競争や淘汰は激化し、労資の対立も深刻化していた。この著作においても、商工業界での恐慌・倒産や労働と資本の対立などの経済界の「悲惨な光景」(23)への言及がある。

他方、大革命後のフランスは、その後も大小の革命・暴動や政体の交代が相次ぎ、第二帝政後に成立した第三共和政も、その基盤は脆弱で、政治-社会的にもはなはだ不安定なものであった。

個別フランスの状況も含め、こうした近代社会全般の混乱は、デュルケムの目には、「道徳が、ある部分においては救いようもなく動揺しており、われわれに必要な道徳がまだほんの形成途上にすぎない」(654)と映るものであった。『社会分業論』は、この「恐るべき危機」(652)のよって来る所以を解明し、ひいては、道徳と社会の再建の方向性と、克服すべき課題とを探ろうとしたものである。

現代社会は、デュルケムが生きた時代とは桁違いに経済活動が膨張し、社会の拡大と分化と複雑化も進行し、かつ加速度的に変化し続けている。そうした状況で、人びとは、濃密で窮屈な人間関係からいっそう解放され、価値観や規範意識は多様になって、ライフスタイルの自由度(自己選択)は飛躍的に拡大した。その反面、失業、貧困、離別、孤立などのリスクには、多かれ少なかれ、社会にも他者にも頼らず、各人で立ち向かうこと(自己責任)を余儀なくされている。こうした状況は、すでに 100 年以上も前にデュルケムが直面した道徳的課題の拡大再生産でもある。

したがって、『社会分業論』において示された問題意識と知見とは、現代社会の把握においてもなお一定の有効性をもっているように思われるのである。本稿は、その糸口を見いだすための一作業である。

デュルケムは、「本書をあらわす機縁となった問題

は、個人的人格 *la personnalité individuelle* と社会的連帯 *la solidarité sociale* との関係の問題である」という(79)。さらにデュルケムは、「個人は、なぜいよいよ個人的 *plus personnel* になると同時にますます連帯的 *plus solidaire* になりうるのか」(同上)と問うが、その真意は、近代的個人はいかにして連帯が可能かという、現代に通じる課題にある。

2. 環節的社会と機械的連帯

デュルケムによれば、われわれには、「各個人に固有」の意識と、「社会全体に共通」の意識がある。「前者は、われわれの個人的人格だけをあらわし、かつこれを構成」しており、「後者は集合類型をあらわし、したがってその存在にとって不可欠の条件である社会をあらわ」している(182)。すなわち、われわれの意識には「個人意識 *la conscience individuelle*」と「集合意識 *la conscience collective*」があり、これら二つの意識に対応して「個人的人格」と「集合的人格 *la personnalité collective*」が存在するというわけである。

デュルケムによれば、発展段階の低い社会ほど、「同じ社会の成員たちの平均に共通な諸信念と諸感情の総体」としての「集合意識」または「共同意識」(145)¹⁾によって、人びとは社会に結びついている。こうした社会では、個人的人格は、社会という集合的人格に吸収されて存在せず、個人意識も集合意識に覆いつくされて存在しない²⁾。ここでは、個性も自律性もない人びとが、あたかも「物として〔物のごとく〕」(378)社会に従属しているのである³⁾。

こうした集団どうしもまた相互によく似ており、それら類似の集団が連結してより大きな社会を形成している。デュルケムは、こうした社会の構造は、同じような環が連なって一つの生命体を構成する環形動物に似ているとして、「環節的社会 *sociétés segmentaires*⁴⁾」と名づけた(298)。またこうした社会では、「社会的諸分子 *les molécules sociales*」が、「無機物体の諸分子」と同様に、「固有の運動をもた」ず、「無媒介的に社会に直接結びつけ」られて「全体として」のみ動くことから、集合意識にもとづいた社会的結合の様式を

1) 『社会分業論』では、「集合意識」と「共同意識 *la conscience commune*」はまったく互換的である。本稿では、直接的な引用等を除き、「集合意識」で統一している。

2) もちろん、「社会進化の初期」においても有機的個体としての個人は存在する(294)。また、いかなる意識も、その生理的基盤は、この個人(有機的基体)以外にはありえない(146, 182)。

3) ここでの「物のごとく *comme des choses*」の意味は、『社会学的方法の規準』(1895 年)において示された「社会的事実」の扱いについての方法的要請とは正反対である。

4) 複数形でのみ使われている。本稿では、訳語として、引用も含め「環節的社会」で統一している。

「機械的連帯 la solidarité mécanique」と名づけたのである (222-223)⁵⁾。

デュルケムは、機械的連帯と環節的社会という連帯・社会類型を設定するにあたって、「ホルド la horde」という「絶対に同質的な一個の全体 une masse absolument homogène」を措定し、これこそが「あらゆる類型の社会がそこから発生するような萌芽」であるところの「真正の社会の原形質 le vrai protoplasme social」だとする。ただし、このホルドは、実在する(した)というよりは、「思弁によって構成」された「社会の理念型 le type idéal d'une société」である (296-297)。

デュルケムは、こうしたホルドがやがてより大きな集団の構成要素としての「クラン le clan」(氏族)⁶⁾へと変質していったと想定し、そうしたクランの「連合」を「クランを基底とする環節的社会」とよんだ。こうして、環節的社会は、まずは相互に類似したクランという「基本的集合体 agrégat élémentaire」の「反復」によって成立したとされたのである (298)。

デュルケムによると、クランを基底にした環節的社会は、その基底集団が単純に並存した状態から始まるが、その後、より大きな集団への「つぎつぎとはめこまれてできた一連のもの〔一連の継起的なはめこみ〕série d'emboîtements successifs」を重ねて、「全体社会 la société totale の統一性」を構成する (302)。環節的社会のこのような重層的な拡大とともに、その最基底をなす基本的集合体は、クランから家族(的集団)へと代わり、さらには村落(的集団)およびそれ以降の地域的(領土的)集合体へと移っていく (311-312)。

したがって、最上位の環節的社会(全体社会)と最基底の社会的環節(基本的集合体)のあいだにある中間集団は、下位の社会的環節から構成された環節的社会であるとともに、上位の環節的社会を構成する社会的環節でもあるという、二つの相をもつことになる。すなわち、「小社会 une petite société」と「大社会 la grande [société]」(370)、あるいは「部分社会 société(s) partielle(s)」(297)と「全体社会」の二相性である。

このように遷移する環節的社会において、ホルドがその前環節的な理念型であるとすれば、全人類を構成要素とする「人類社会」(国際社会ではない)は、超環節的社会な理念型といえよう⁷⁾。この二つの理念

型のあいだに、現実にもその存在を確認できる様々なタイプの環節的社会が位置づけられることになる。

こうした環節的社会の発展(拡大)において、その初期段階では、各環節は、その萌芽であったホルドの「絶対に同質的な一個の全体」という性格をもち越して、「それ特有」で「閉鎖的」な「小社会」を形成している (370, 475)。そして、それとは裏腹に、各環節のあいだに交流はなく、「異なる他の諸環節を遮断する隔壁」(440)によって囲われて、「道徳的な真空地帯 des vides moraux」(422)が横たわっている。

したがって、環節的構造が明瞭な場合には、社会生活は、基本的には小社会ないしは部分社会としての社会的環節の内部で自足しているのであって、大社会ないし全体社会としての環節的社会は、直接的な生活環境ではない。機械的連帯がもっとも典型的な姿をとるのは、こうした狭小な社会環境においてなのである。

3. 初発の分業と個人的人格の出現

ところが、デュルケムによれば、ホルドがクランという社会的環節へと変化した段階で、かつて有していた「独立性 être indépendante」を、すでにいくらか失っている (298)。それは、クランどうしの独立性があまりに高ければ、相互に結合する契機はなく、したがって環節的社会の形成も不可能だからである。こうして、「環節的組織は、社会が発展するにつれて、しだいにそのきわだちを失ってゆく」(313)。

環節的社会の成立と同時に環節的構造の崩壊が始まっているという見解と関わって興味深いのは、すでにこの始原的段階において、「社会分化」(社会的分業)と「個人」(個人的人格)の出現がみられるという指摘である。

デュルケムは、ホルドという「絶対に同質的な一個の全体」を措定したように、政治的権威も性的分業もない、純粋な「共産主義 le communisme」が存在した可能性を否定していない (303, 323)。しかし、ホルドがクランに変化するとともに、それは、「政治=家族的 politico-familiale」な性格を帯びることになるという (299)。すなわち、社会分化の始まりである。

「まったく一時的な両性の関係」(114)にとどまらない持続的な「夫婦結合 la société conjugale」は家族

5) 集合意識にもとづく機械的連帯および環節的社会と対比されるのが分業にもとづく有機的連帯および組織的社会であるが、本稿では扱わない。

6) 本稿では、「clan」の訳語として、引用も含め「クラン」で統一している。

7) デュルケムによれば、(唯一の)人類社会 (l'humanité, une société humaine unique) は、「その実現がまだ保証されていない望ましきもの」にとどまっていて (649, 656)、対極のホルドと同様、あくまでも思弁上の構成物である。

の基盤であるが、その連帯の源泉は、「性的分業 *la division du travail sexuel*」にあるとされる (109)。

政治的な分化についても同様である。機械的連帯の源泉である集合意識の特質が「爾余の人びとの上にぬきんでた首長」に乗り移るのは「必然的」であり、そうした「絶対的権力」に人びとが服するとき「分業が出現したことになる」。デュルケムは、こうした「蛮族の専制君主とその隷属者との関係」を「初発の分業 *première division du travail*」とよんでいる (303-304)。

そして、デュルケムによれば、この首長こそが「社会全体から解放された最初の個人的人格 *les premières personnalités individuelles*」なのであり、その出現こそ「個人主義」への道のりの第一歩なのである (325)。そうであれば、その首長の威厳は、すべての個人 (人間) の「尊厳」(後出) の起源でもあるだろう。

4. 集合意識の衰退と抽象化・一般化

このように、環節的社会が「小社会」と「大社会」、あるいは「部分社会」と「全体社会」との「継起的な一連のはめこみ」によって成立しているとすれば、機械的連帯の構成原理である「集合意識」にも、小社会 (部分社会) に対応するものと、大社会 (全体社会) に対応するものとの区別があることになる。デュルケムは、前者を「局地的集合意識 *la conscience collective locale*」、後者を「一般的集合意識 *la conscience collective générale*」とよんでいる (470)。

小社会 (環節) という狭い集合的環境は「本質的に具体的」であり (469)、したがって、その狭い領域を視野に収める局地的集合意識も具体的である (470)。「個人を完全に包みこんでしまうほど小さい区画」では、「集合意識」はしっかりと「保持」されており、「社会統制」も「厳格」である (488)。

それゆえにこそ、環節的構造と機械的連帯が明瞭なところでは、個人は、固有の意識も自由ももたず、社会に「所有されたもの *l'objet possédé*」のごとく、文字どおり「社会の思うがまま [の物件] *une chose dont dispose la société*」なのである (224)。そして、「これと反対に、こうした [小さな] 区画が消滅するにに応じて、社会統制も共同意識も衰微する」(488)。

ただし、こうした局地的集合意識の衰微は、ただちには社会全体の集合意識の衰退を意味しない。個人

は、所属する小社会 (環節) 間の隔壁が小さくなることで、それだけ解放されたとしても、「環節たるものは、すべて社会全体 *la masse sociale* のなかによいよ吸収しつくされてゆく」(352) のであるから、今度はより大きな社会に包摂されることになり、より一般的集合意識の支配を受けることになるからである。

しかし、社会が拡大するにつれ、集合意識は「その本質が変わってくる」。つまり、「あらゆる局地的な多様性を超越して高められ、ますます広い空間を支配することを余儀なくされ、したがって、いっそう抽象的にならざるをえない」。「なぜなら、こうした多様な環境のことごとくに共通しうるのは一般的な事物 *des choses générales* のほかにはないからである」(469)。

こうした抽象的・一般的集合意識は、かつての集合意識が保持していたような、人びとの個別具体的な思考や行動を厳格に規定し監視する力を、もはやもちえない。逆に、「共同意識」が「[かつての] 支配権と決定的な作用とを失」うことで、「個人的人格」が社会生活の「はるかに重要な一要素と」なる (281)。

要するに、「高級社会⁸⁾では、集合意識は社会の心理的生活のごく限られた一部分にすぎない」のである。今日の社会には、抽象的・一般的集合意識がカバーしえない広大な心理生活の領域が広がっている。したがって、そもそもこのような集合意識を集合意識とよんでいいものか、デュルケム自身が当初からためらいを覚えていたほどである (146-147)。

デュルケムの議論で興味深いのは、環節的社会的成立とその発展 (拡大) は、社会の環節的構造の弛緩と機械的連帯の衰退の過程でもあり、そのことが、社会分化 (社会的分業) と個人意識 (個人的人格) の発展の前提である、という議論になっているからである。

もちろんそこには、デュルケムの生きた時代が「歴史上かつて先例をみない速さと広がりをもって、環節的類型から解放されてきている」という、近代化への特別の視線がある。また、「深刻な変動」によって急速にうがたれた、容易に埋め合わせることのできない道徳の「空白」への危機意識がある (653)。

しかし、「集合類型」や「共同意識の凋落は、はるかなる時代からこのかた、ずっと続いてきたものである」。それと並んで、「個人主義や自由思想 *l'individualisme, la libre pensée*」も、「歴史の全過程を貫いて、たえず発展してきたものである」(287)。ここには、

8) デュルケムの社会類型論は社会の発展図式論でもあり、当該の社会の発展段階が低いことを示すのに「低級な *inférieur*」、高いことを示すのに「高級な *supérieur*」という言葉を使っている。

個人化と個人主義との発展が、近代化をまって始まったわけではなく、また近代の成立をもって終わるわけでもない、人類史の、つねに未完の、普遍的過程であろうとの示唆がある。

5. 個人意識と個人的人格の成長

環節的社会は拡大するが、それは、環節的構造の衰退と集合意識の一般化・抽象化をともなうものであり、それゆえに、環節的特性の衰退の過程でもあることを見てきた。この過程はまた、個人的人格と個人意識の成長の過程でもある。「共同意識が一般性を帯びるようになればなるほど、それは個人的差異により多くの余地を残すようになる」(473)。そしてそれだけ、「そのおのおのが自発的な活動の源泉 *une source d'activité spontanée* とな」り、「個人の人格 *les personnalités particulières* が構成され」、「自我意識 *conscience d'elles-mêmes* をもつようになる」(562-563)。

デュルケムによれば、個人的人格も、その最初の出現についての説明のように、集合的人格のもとで、集合的人格の移譲によってしか誕生・成長しえない。しかしそれはまた、それらの諸原因が失われていくという条件においてのみ、可能にというより、機械的に必然となる。「個人的人格を集合的人格に吸収させるのは、すべて機械的諸原因」である。しかし、「個人的人格を集合的人格から解放するのも、同質の諸原因である」。そして、「この解放がおこるのは〔……〕それが必然的におこらざるをえないからである」(490)⁹⁾。

このように、個人意識と個人的人格とは、環節的社会構造の緩みと機械的連帯の衰退、そして集合意識の一般化・抽象化の進行とともに、機械的・必然的に成長してくる。しかし、それはまた、個人への「集合的監視」が緩和された結果でもあり、そのため、「各個人の自由な活動領域が事実として拡大し、既成のこの事実はずいぶん権利となる」(486、傍点は芦田)。

「思想の自由〔自由検討〕*le libre examen*」も、「〔往時の〕宗教的信仰があらかじめ退化」してはじめて、可能になったのである(466)。個人意識と個人的人格の発達、とりもなおさず、かつては「社会の思うがままの物件」(前出)であった個人が「行為の自律的源泉 *une source autonome d'action*」としての「一個人〔ひとりの人間〕*une personne*」(645)へと変貌

を遂げたということなのである(傍点は芦田)。

こうして「機械的な原因」によって得られた「自由」は、やがて「必要物」となり、「聖なるもの *sacrée*」にもみえてきて、「一度手に入った権利は、より大きな自律性をもつように」なる(486)。個人の自由や自律性の獲得は、事実経緯としてはもちろん、権利問題としても否定することはできない¹⁰⁾。

6. 「人間の絆」の解体

しかし、この自由や自律の「権利」は、他方では、「個人的紐帯〔人間の絆〕*liens personnels*」が「稀少となり弱く」なった結果であり、おたがいの「無関心 *on s'en désintéresse*」と「冷淡さ *mutuelle indifférence*」とを対価にして獲得された(485-486)、ほろ苦い果実でもある。個人意識と個人的人格の成長は、個人の自由とともにその多様性を拡大する。それは、一方では人びとを社会の絆(ほだし)から解放するが、他方では相互の絆(きずな)を奪い、たがいを疎遠にする。個人的人格は、「われわれ各人」に「固有かつ特徴的に」そなわったものであるがゆえに、それは、ただ集合的人格から区別されるだけでなく、「他人のそれから区別されるもの」(222)でもあるからである。

デュルケムによれば、われわれ個人のなかに並存している「個人性 *l'individualité*」と「共通性 *la communauté*」とは、「二つの相反する力 *deux forces contraires*」として働く。前者は「遠心的 *centrifuge*」であり、人びとを相互に遠ざける。後者は「求心的 *centripète*」であり、相互に近づける。そして、この二つの力は、「同時に大きくなることはできない」。「人間は正反対の二方向に向かって同時に発展することはできぬ」のである(223)。

「個人的反省 *la réflexion individuelle* というものは人ごとにその質も量も違うものであるから、この反省が生みだす結果もすべて人ごとに違う」。それゆえに、「個人的反省がめざめてくれば、きっと不一致がおきってくる」。「だから、こうした遠心的な傾向は、社会の凝集力とその運動の調和とを犠牲にしてまで倍加してゆくようになる」とデュルケムはいう(260-261)。

もっとも、さきにふれたように、個人的人格と個人意識の伸長は、集合意識が「全面的に消えさってしまうかもしれぬということの意味するのではない」。今

9)『社会分業論』では、「機械的連帯」のほかにも、「機械的 *mécanique* (ment)」という言葉が何度か出てくるが、基本的には、人間あるいは個人の(自覚的な)意思や目的論を排して、ある種の客観的必然性をあらわすものとして使われている。

10)『社会分業論』では、個人の自由(自発性)や自律性の阻害がもたらす異常は、「拘束的分業」として論じられている。

日でも「共同意識が固まり、明確なものとなる場が十分ににある」。デュルケムは、それを、「個人 l'individu にかかわる」場だとしている (288)。

社会の発展とともに、「個人こそがある種の宗教の対象」となり、「われわれは、人格の尊厳 la dignité de la personne のために、ある礼拝式 un culte をもつ」。「この礼拝は、すべての強烈な礼拝と同じように、すでに盲目的な信奉 ses superstitions」をともなった「共同の信仰 une foi commune」だという (288)。

ただし、デュルケムによれば、「この共同信仰は、それが共同体によって担われているかぎりでは共通の commune であるとしても、ほんらい、その目標からして個人的 individuelle である」。それは、「われわれ〔個人〕どうしを結びつけるだけ」で、「社会にわれわれを結びつけるのではない」。デュルケムは、よって、この共同信仰は「真の社会的紐帯 un lien social véritable をつくりあげはしない」として、こうした集合意識の「まったく例外的」な性格にその限界を見ている (288-289)。

しかし、この説明は少し奇妙である。この集合意識も、「人間 homme」という「同類 semblable」であることを命じることで、集合意識本来の特性を保持しているはずである (635-636)。なるほど、この人間は、「人間一般 l'homme en général ではあっても、特定の社会種に属する人間ではなかろう」(636)。そうであれば、「人類」という理念的な(思弁上の)「社会」に準拠した共同信仰であるところに限界があると考えたほうが、デュルケムの議論の筋道に照らして妥当ではなかろうか。

デュルケムによれば、今日の「共同道徳」は、「人間にたいして、言葉のまったき意味での人間であること être un homme dans toute l'acception du mot」を命じている。しかし、そうした「集合的理想」も、「きわめて抽象的一般的」であるからこそ、「全人類 l'humanité tout entière の理想であると思ひこむ croire」ことが可能なのである (636)。

それに、こうした「一般的集合意識」が現実生活において具体的な効力をもつためには、その解釈は自律的な各個人の「自由検討」に委ねざるをえないであろう。それは、「いや増す無数の個人の分裂 dissidences

individuelles」(288)をいっそう促すはずである。

「人格の尊厳の礼拝」という「共同信仰」は、真の紐帯をつくらないというよりは、強い紐帯をつくれないということではないか。社会(的理想)に結びつけはするけれども、その社会(人類社会)は観念的であり、その理想は抽象的・一般的である。それゆえに、人びとを社会(的理想)に結びつける力が弱いということであろう。そうであれば、個人どうしを結びつける力についても疑問の余地がある。

7. 消極的個人礼拝と積極的個人礼拝

これまでの検討をとおして、「個人(の尊厳)」(651, 642), 「人格(の尊厳)」(642, 288)などと表現される「個人／人格的なものの礼拝」¹¹⁾には、「個人的 individuelle」と「人間的(人類的) humaine」という、二つの側面があることが見えてくる。

ひとつは、個人の「個性」と「自由」が「聖なるもの」とも「権利」ともなり、「行為の自律的源泉(自発的な活動の源泉)」としての個別的な「個人的人格」という意味での「ひとりの人間」(前出)であることが、命じられ「義務」となるような「礼拝」である¹²⁾。「いまでは個人的人格が発達し、より多くの要素を含むようになった」ため、「個人〔的〕人格にたいする侵害」と目される範囲も広がっている (262)。

もうひとつは、われわれが「人間」という「同類」であり(前出)、「われわれの同類にたいしては優しく、公正であり」(651), 「[すべての] 人間にたいして、言葉のまったき意味での人間であること」(前出)を命じるような、普遍的な「人格(の尊厳)」のための「礼拝」である。しかも、この「[人間的／人類的] 人格 la personne humaine」や「人間性〔人類性〕 l'humanité」は、「自己」のうちにおいてよりも、「他者」のうちにおいてこそ実現されるべきものとされているのである (665)。

このような二面性をもった「礼拝」は、後に『宗教生活の原初形態』(1912 年)において、宗教上の主要な儀礼的態度とされた、二種類の「礼拝」概念を想起させるものである。ひとつは、「聖なるもの」への接近が厳しく禁止される「消極的礼拝 le culte négatif」

11) 他の著作や講義などに広げれば、「礼拝 le culte」の対象としては、「人間 l'homme」, 「人間的個体(個人) l'individu humain」, 「人間的人格 la personne humaine」などの例もある。また、「人類(人間性)の宗教 la religion de l'humanité」や「個人の宗教 la religion de l'individu」といった表現も見られる(芦田 2018:200)。なお、ここでの“culte”の訳語としては「崇拜」もよく用いられるが、本稿では「礼拝」で統一している。

12) ただし、他の著作を含め、「個人的人格の礼拝 le culte de la personnalité individuelle」というような、直截的な表現は確認していない。

であり、もうひとつは、それへの接近と奉獻が義務づけられる「積極的礼拝 *le culte positif*」である¹³⁾。

デュルケムがいうように、個人的人格が人びとを分離する「遠心力」として働くのであれば、この礼拝は、個人を社会に、あるいは自己を他者に、結びつけるものではない。むしろ、まずは、各人の固有の領分である、個人的人格や個人意識を侵害しないという、「分離」の担保を重要な機能とするものであろう。

とはいえ、この個人的人格の聖化という消極的礼拝は、人間的（人類的）人格がなんらかの礼拝の対象であるためには、欠かせない構成要素でもある。デュルケムは、個人的人格の成長を社会解体的にのみ捉えていたわけではない。それはまた、積極的で求心的な人格の尊厳の礼拝という、新たな共同信仰にとって不可欠な前提でもある。

「前にもまして強力になってきた唯一の集合感情は、社会的〔な〕物を対象とするものではなく、個人を対象とする」ものである（傍点は芦田）。そして、「そうであるためには、個人的人格が社会生活において、はるかに重要な一要素とならなければならぬし」、「個人意識」は、「共同意識のくびきから解放されなければならない」（281）。

デュルケムが使う “*personnalité*” と “*personne*” という二語は、いずれも「人格」と邦訳されることが多い。また、デュルケムの「礼拝」の議論そのものも、断片的であやふやなところがある。そうしたことから、その「人格の礼拝」論を取り上げる際には、少なからぬ混乱があるように思われる。

しかし、その議論を少し丁寧に追っていくと、近代社会においては「個人の礼拝 *le culte de l'individu*」（651）という「共同信仰 *une foi commune*」（前出）が成立するが、そこには “*la personnalité*” の礼拝」という消極的（遠心的）な側面と、“*la personne*” の礼拝」という積極的（求心的）な側面があるという、デュルケムの見解が浮かびあがってくる。それゆえ、“*personnalité*” は（“*collective*” との対比で）“*individuelle*” という形容詞とおおむねセットになっているの

であり¹⁴⁾，“*personne*” には（これは『社会分業論』の後になって、より明瞭になることであるが）“*humaine*” という形容詞が親和的なのである¹⁵⁾。

8. パーソンズ的解釈の影

論者のなかには、デュルケムが近代社会の連帯を個人の自由・自律や人格の尊厳という「道徳的個人主義 *l'individualisme moral*」で基礎づけようとしたという解釈も少なくない。こうした理解の背景には、タルコット・パーソンズの影響があると思われる。

早くにパーソンズは、デュルケムが『社会分業論』の段階で「共通の信念・感情」という「集合意識」の重要性に気づいており、「その倫理的ないし価値的性格」が「中心的な観念」として「強調」されていたという（パーソンズ 1982: 27-28）。また、その後の『自殺論』（1895 年）の段階になると、「個人の人格そのものを倫理的に評価する」ことが近代社会の「支配的な共通の道徳感情」となり、「個人の人格に対する崇拝 [個人的人格の礼拝] *the cult of individual personality*」（イタリックは芦田）が、「個人を解放するといったことがら」とは「異なった種類の倫理的制約」だとする観点が明瞭になったという（同上: 47）。

パーソンズのデュルケム解釈には、「第一義的に重要なのは規律の問題」（同上: 53）だとする規範主義的な偏りがみられる。それに対し、1970 年前後のいわゆる「デュルケム・ルネッサンス」以降の再解釈と評価の流れには、パーソンズ的解釈の偏りを意識して、個人の自由・自律や人間的共感などを強調する理想主義的な傾きがある。しかしその実、後者も「個人主義」という「共通の信念・感情」（同上: 53）への着目ということでは、その軸足に違いこそあれ、パーソンズと同じ土俵の上にいるともいえる。そのうえで、そうした道徳的個人主義の観点から、ひるがえって『社会分業論』を読み解こうとする議論もある。

しかし、「個人的人格」と「社会的連帯」とを、「個人の礼拝」に内在する遠心的・消極的な側面を捨象

13) 「道徳的事実の決定」（1906 年）においては、「人間〔的〕人格 *la personne humaine*」は、それへの侵入が「冒瀆 *sacrilège*」と見なされる一方、われわれの「共感の優れた対象」になるという、「二重の側面」をもつとされている（佐々木沢 1985: 69-70）。デュルケムのこうした観念をもとに、アービング・ゴフマンが「回避の儀式」と「提示の儀式」という、近代人に要求される二種類の儀礼的態度を概念化したことは周知のところである（ゴフマン 1986）。

14) 後に “*individualité*” と “*personnalité*” とは「最大の注意を払ってそれらを区別することが重要」（佐々木他訳 1988: 263）とされるが、この問題は本稿では取り上げない。

15) もっとも、“*humaine*” と “*individuelle*” とが厳密に使い分けられているわけではない。たとえば、「人間の尊厳 *la dignité humaine*」及び「個人の尊厳 *la dignité individuelle*」という表現が見られるが、同義に使われていると思われる（641-642）。また、「人格 *personnalité*」、「人格 *personne*」、「物件 *chose*」、「人間性（人類性）*humanité*」、それに個人や人間や人格の「尊厳 *dignité*」といったデュルケムの用語には、それぞれ “*Persönlichkeit*”, “*Person*”, “*Sache*”, “*Menschheit*”, “*Würde*” といった、カント道徳哲学の諸概念を想起させるものがあるが、この問題についても別の機会に譲りたい。

し、その求心的・積極的な側面のみに準拠して、トートロジカルにつなぐことには、『社会分業論』のそもそも初発の問題設定を無化するものとして違和感がある。デュルケムは、あくまでも、「遠心的傾向」を特性とする「個人的人格」と、「求心力」を必要とする「社会的連帯」とをつなぐ、容易ならざる道すじを探ろうとしたのである。しかも、「人格の尊厳の礼拝」という求心的礼拝も、その抽象性・一般性のゆえに、強い社会的紐帯はつくりないとされていたのである。

9. 「複雑な連帯」という課題

残された課題は、これこそ『社会分業論』の本題なのであるが、このように分離した諸個人が、後に『自殺論』で提起された「エゴイズム *égoïsme*」(孤立)や「アノミー *anomie*」(放縦)に陥ることなく、他者との「紐帯(絆)」や「社会的結合」をどのように回復するのかという問題である。個人的人格や個人の自由・自律は、それだけでは、積極的な連帯を可能にするわけではない。

デュルケムは、『社会分業論』第二版序文(1902年)において、「未組織の無数の個人 *une poussière infinie d'individus inorganisés* から構成され」(イタリックは芦田)、「肥大症的な国家」が「それらの個人をだきとめて手放すまいとする」、「まさしく社会学的な怪物」となった社会の到来への懸念をもらしている(58-59)。そのさらに 120 年近く後に生きるわれわれなら、「物のごとく」(前出)ならぬ、ばらばらの「塵 *une poussière*のごとく」と化した個人が、国家よりもっと得体の知れない「(社会) システム」という名の「怪物」に呑み込まれたり、廃棄されたりという、同時代像を描くことも可能であろう。

デュルケムは、個人が「いよいよ個人的になる」ことと、「ますます連带的になる」こととのあいだの「二律背反」は「表面上」のものだとして、本稿ではあえて検討を避けたが、両者を「社会的分業」によって架橋しようとした(79)。しかし、デュルケム自身、深刻な分業の「異常形態」の存在を認めざるを得なかったように、そのあいだには、分業では解消しない重大な矛盾があることも十分に認識している。

したがって、問題は、「空白」のまま残されているもう半分、この研究の核心部をなす積極的な連帯について議論である。この空白は、デュルケム自身が述べ

ているように、抽象的・一般的な「人間的(人類的)人格の礼拝」(だけ)では、埋め合わせることの難しいものである。

デュルケムは、『社会分業論』刊行後ほぼ 10 年が経ってからの講義においても、「各々の意識がひとつの共通意識〔共同意識〕*une conscience commune*の中で融け合い通い合うことを大きく妨げているのは、個性的な人格〔個人的人格〕*la personnalité individuelle*である」と吐露している(麻生他訳 2010: 391)。したがって、「各個の自律性を損ねずに、全体を構成する多様な諸部分を相互に結びつけるためには、非常に巧妙な組織 *une organisation assez savante* をもった複雑な連帯性 *une solidarité très complexe* がどうしても必要になってくる」(同上)。それは、単純に強い集合意識や集合的人格の再興ということではないであろう。この課題については、また稿をあらためて論じたい。

【文献】

[デュルケムの著作]

- 麻生 誠他(山村 健)訳 2010,『道徳教育論』(*L'éducation morale*, 1925), 講談社学術文庫
 佐々木交賢 訳 1985,『社会学と哲学』(*Sociologie et philosophie*, 1924), 恒星社厚生閣
 佐々木交賢他(中嶋明勲)訳 1988,『社会科学と行動』(*La science sociale et l'action*, 1970), 恒星社厚生閣
 田原音和 訳 2017,『社会分業論』(*De la division du travail social*, 1893), ちくま学芸文庫
 古野清人 訳 1975,『宗教生活の原初形態』上・下 (*Les formes élémentaires de la vie religieuse*, 1912), 岩波文庫(改訂版)
 宮島 喬 訳 1978,『社会学的方法の規準』(*Les règles de la méthode sociologique*, 1895), 岩波文庫
 宮島 喬 訳 1985,『自殺論』(*Le suicide*, 1897), 中公文庫

[参考文献]

- 芦田徹郎 2018,「デュルケム「道徳的個人主義」・再考ーその現代化のために」, 甲南女子大学研究紀要・人間科学編 (54)
 ゴフマン, E. (浅野敏夫 訳) 2012,『儀礼としての相互行為ー対面行動の社会学』(新訳・新装版), 法政大学出版局 (Goffman, Erving, 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Anchor Books.)
 パーソンス, T. (稲上 毅・厚東洋輔 訳) 1982,『社会的行為の構造 3 デュルケム論』, 木鐸社 (Parsons, Talcott, 1937, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, New York: McGraw-Hill.)